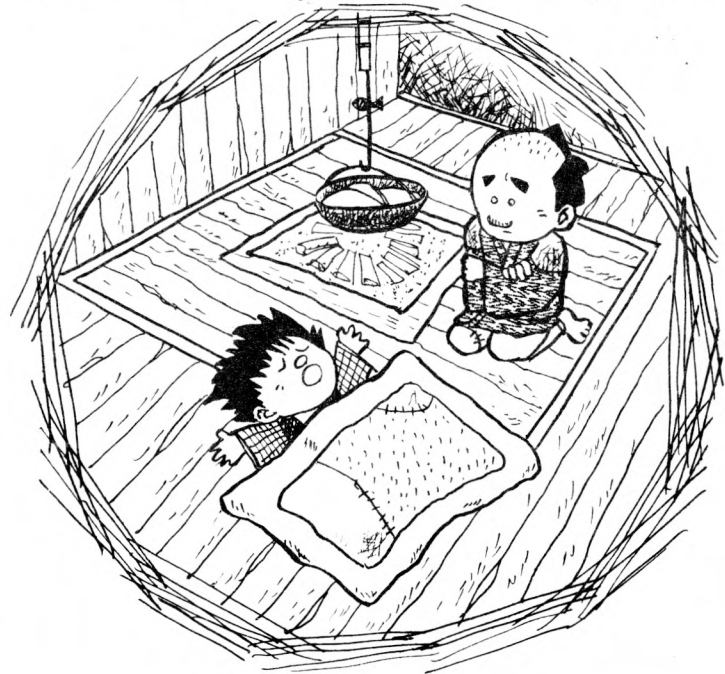


茂吉はもう覚悟を決めたというふうにならずに、起き出し、ふるえながら土間に降りて戸をあけますと、外にはもう、千子、千子と寒々として来た空気の透明さを際立たせるように雀が鳴いておりました。
 「このぶんだら、そう長いことでもねえべ、もう冬が来そうなのよきになつた、まあ、おらかかじかまねえようにして、おいてやるだ。」
 そんなこんなで茂吉は毎日、あつぽつこい綿入れを着て、その上からかいてまきをかけて、ふとんをつみあげねむつて来たというのでした。風の子は尋ねて来た晩から、外がすっぴん寒くなつて霜がおりる頃になつても目をさましません。里の人達は、
 「どうしたんだ、ことしは、もう秋で、もねえべ、木が葉っぱをおとさね、からっかきもふかぬだ、はあ、畑のしまつにや、たすかるが、妙な気がするだ。」
 「そう、いえ、は、そうでした、いつも、年なぶう、子供達もほっぺをし、だいに赤くして、るになつて、枝に止つて、いるはずですの、に、」



とゴトツとしんぱり棒をかいながら、茂吉がききますと、
 「おらあ、もう外は、まっさらな雪だと思つた、こら、てっさり寝すごしたと思つてよ、あわくつてとびだした。したけか、外にやあ、恐ろしいことにまだ、秋にぼうが、頑張つて、るでね、か、はあ、こら、しまつた、帰らねばなんね、そう思つただ、けん、ど、それまで寝込んでいた岩の穴は、あ、ほ、た、れ、の、熊、が、い、い、い、の、も、ん、で、冬、ご、り、す、る、つ、ち、う、も、ん、で、く、れ、て、や、つ、た、の、だ、つ、た、。、そ、つ、た、ら、わ、け、で、い、ち、ん、ち、中、ど、つ、か、ね、ば、し、よ、は、な、か、ろ、う、か、と、探、しま、わ、つ、た、ち、う、わ、け、だ、。、は、あ、く、た、び、れ、た、。、こ、こ、さ、お、い、て、く、れ、ろ、な、。」
 「ふん、ふん」と話をきいていた茂吉は、どういふ具合だかこの北風の子らしい男童にすっかり同情したとみえて、
 「ほれ、じやあ、おらも一人のこつたし、そう長いことじやな、かろうからええぞ。」
 と言つてしまつたのでありました。
 その夜は、風の子も茂吉も何やらすっかり疲れ果て、そのまま寝入つてしまいました。
 次の朝目が覚めて、茂吉は悪い夢を見

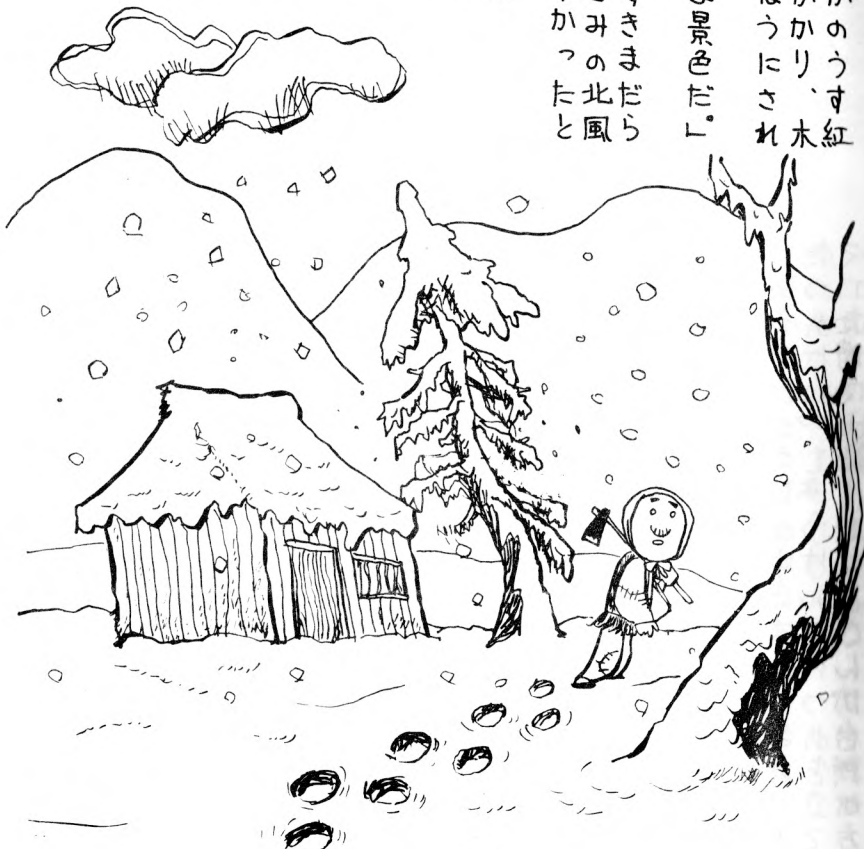
たような気もいたしました。けれど、横には、スヤスヤときもよさげに、小んこい子供が寝ておりますもの、夢なぞではありようがないのでした。
 「それにして、も、冷えるぞ、けさは、霜でもおりましたべ、おら、つとこの畑は、太丈、夫だべ、か、茂吉が、ね、が、え、り、を、う、ち、ま、す、と、ん、の、中、で、何、だ、か、妙、に、ふ、だ、ん、と、ち、が、つ、て、い、る、よ、う、に、み、え、ま、し、た、。」
 「あれよ。」
 よくよく耳をこらした茂吉は、とんでんがえつておどろきました。なせ、つて、まあ、は、り、か、ら、天、井、か、ら、床、ま、で、キ、ウ、キ、ラ、と、し、た、細、か、い、氷、の、結、晶、か、キ、シ、キ、と、音、を、あ、げ、そ、う、に、み、つ、し、り、と、つ、い、て、い、た、の、です。
 しはらくは、おどろいて、声にもなりませんでした。
 「寒いはずだ、あ、ま、冬に遊びまわる風の子をおいた、だからあたりまえかし、ね、ぼ、だ、い、も、な、あ、恐、ろ、し、こ、つ、た、。」
 と、横では風の子が、何も知らずに、すやすやとねいきを立てて寝ていました。

村の人達が口々にそいふことをして、
 いるのを茂吉がきいた。その次の日のこと
 でした。朝から空をふさぐ日加来たので、
 い雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 た。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 白。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 クルと。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 た。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 ました。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 寝入った。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 と。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 ね。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 り。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 今日。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 帰。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 が。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 かね。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、
 き。雲が朝から空をふさぐ日加来たので、

音かしのねと変だあ、子供のほつたもひ
 びわねえし木の葉っぱもまだ残って
 いるだ。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 た。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 こと。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 凍。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 子。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 雪。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 子の顔。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 リ。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 え。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 た。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 ました。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 も。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 お。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 と。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 の。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 った。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 じ。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 その。ねえし木の葉っぱもまだ残って

く。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 の。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 も。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 て。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 と。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 と。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 の。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 も。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 け。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 も。ねえし木の葉っぱもまだ残って
 いう。ねえし木の葉っぱもまだ残って

おしま

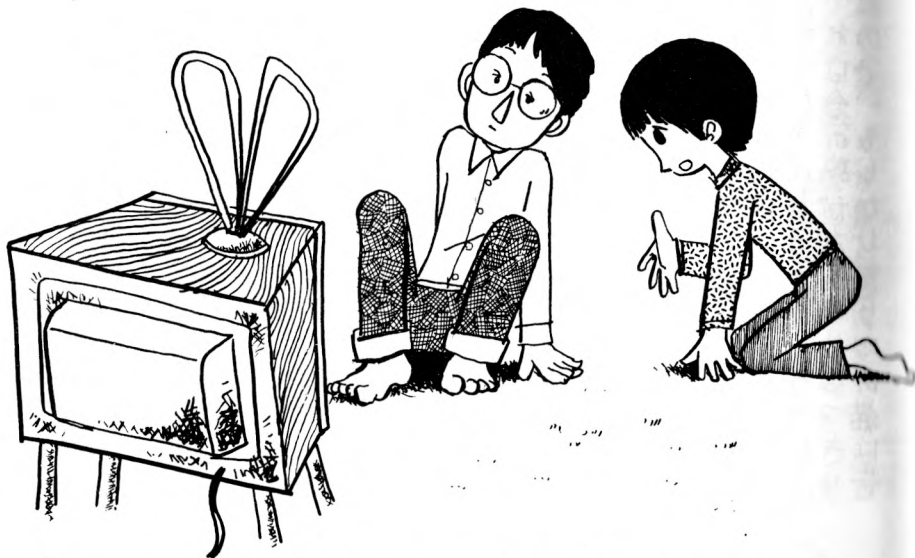


にポカポカとてって春みたいな日だまり
 をつくって、みる中にすわって、ねこの
 ねこをみながら、二つめをゆくりとた
 べてゆきました。食べおえると、あと
 かごに三つ残った。食べの上のオレンジ
 色をした果実を横目でみながら、な
 ーふう、またあとにしよ、おいしかった
 ー：あ、手がべとべと、今日、い
 めんが、あ、さうかな、ね、今日は、い
 げんが、よさそうだな、天気、いい、と
 こは、うれしいのかしら、太陽の色、と
 すい方の夏ミカンみたら、太陽の色、と
 ン、うん、冬にできるの、ミカン、ハ
 ー、うん、だ、おかし、ミカン、ハ
 ミカン、でも、わかるけど、おかし、ミ
 おかし、いや、あと、で、い、ナツミカ
 かな、だ、いや、あ、お、ナツミカ、ハ
 いる、だ、いや、あ、お、ナツミカ、ハ
 ね、この顔を、きつと、知、ね、こ、器、あ
 ね、この手の先、ぼ、ぶ、く、と、器、あ
 くだ、な、ピン、リ、色が、う、ら、に、あ、っ、て、器、あ
 き、だ、な、ー、う、ら、に、あ、っ、て、器、あ
 見、な、ら、る、は、し、ば、ら、く、ね、の、方、を、じ、つ、と
 間、に、ね、こ、は、顔、を、終、え、て、胸、か、ら、前、足、そ、の



れからお腹へ移って最後にしつぽの先ま
 でなめると、大きなのびをひとつして、
 くるんとまあるくまるまってしまおうと
 しました。その一瞬、わたるははははと
 手を伸ばして、ねこの方はといえはははと
 ました。抵抗しようといえはははと
 して、おつかさん、がきれいにみかいて、
 っも、おつかさん、がきれいにみかいて、
 床、な、の、す、か、ら、す、う、つ、と、す、べ、つ、て、わ、ら、る
 の、手、の、中、に、お、さ、ま、つ、て、ま、い、ま、し、た、
 ー、ク、ク、ク、と、わ、た、る、は、笑、つ、て、ね、こ、を
 じ、い、つ、と、み、て、み、ま、し、た、わ、た、る、は、ね、こ、を
 を、抱、え、る、の、が、大、好、き、で、特、に、そ、の、し、つ、ぽ
 と、き、た、ら、ね、こ、は、別、の、生、き、物、の、様、な、の、で、
 す、か、ら、大、の、お、気、に、い、り、で、し、た、
 ー、ね、こ、の、お、で、こ、か、：、狭、い、な、ん、て、う、そ、だ
 な、ど、こ、が、お、で、こ、か、頭、か、わ、か、り、や、し、な、い、
 と、思、い、に、こ、つ、と、笑、つ、て、ば、っ、き、ん、を、一、ぱ、
 つ、く、ら、わ、せ、た、時、で、し、た、
 ー、な、に、す、る、ん、だ、
 と、ど、こ、か、か、ら、声、が、し、ま、す、
 わ、た、る、は、き、よ、ろ、き、よ、ろ、あ、た、り、を、み、ま
 ー、お、い、ち、や、ん、か、い、ね、？、来、て、よ、き、き
 たい、こ、と、あ、る、ん、よ、
 ー、お、い、ち、や、ん、か、い、ね、？、来、て、よ、き、き

とよびました。
 でも、家の中は、しいんとして、外
 で、鳥、が、チ、チ、チ、と、(夕方方らしい) 声
 を、出、し、て、い、る、の、か、き、こ、え、る、程、で、し、た、
 ー、お、か、し、い、な、あ、お、い、ね、こ、お、ま、え、か
 ？、ち、よ、つ、と、肩、を、す、く、め、て、冗、談、み、たい、に、ね
 こ、を、み、ま、し、た、す、る、と、な、ん、と、ま、ま、
 ー、あ、あ、そ、う、さ、お、れ、と、お、ま、え、し、か、い、や
 せん、よ、
 と、ね、こ、が、答、え、た、の、で、し、た、
 と、ね、こ、は、も、う、わ、た、る、は、び、く、り、ぎ、よ、う
 て、ん、し、て、し、ま、い、ま、し、た、だ、っ、て、わ、た
 る、が、赤、ち、や、ん、の、頃、か、ら、い、る、ね、こ、は、口、を
 き、く、な、ん、て、一、度、だ、つ、て、し、た、こ、と、な、か、つ、た
 ー、ん、で、す、か、ら、家、に、い、る、の、じ、や、な、く、つ、た
 っ、て、ば、っ、き、ん、を、く、ら、わ、し、た、こ、と、に、も、ん、く
 た、な、ん、か、い、う、ね、こ、を、み、た、の、は、は、じ、め、て、で、し
 ー、お、ま、え、も、ば、か、だ、な、あ、お、れ、を、み、と、つ、て
 し、や、べ、ら、せ、ん、か、と、思、う、た、こ、と、は、な、か、つ、た
 ー、ん、か、そ、う、ゆ、い、の、を、想、像、力、の、欠、乏、ち、ゆ、う
 し、じ、や、る、な、
 わ、た、る、は、ぼ、ー、せ、ん、と、ね、こ、を、み



「またわたるをみると、
 「おれのしやべること、人に言わせんね。」
 と付けたしました。
 「まあね、言ったって誰も信じやせんか
 ら。」
 と秘密を持ったことがうれしくて、わた
 るはホクホクしながら約束しました。
 その時でした。
 「ただいま。」
 とにいちやんが帰ってきて、それに続い
 ておかあさんも入ってきました。そして、
 「そこんとこでいちやんと会ったんよ、
 あじのおいしいのがでてたから、ぼった
 りにしようね。」
 と言いました。
 わたるはぼったりが大
 好きです。あじをたたいておとうふと
 まぜたやつが大根やらなんやうのお汁の
 中に入っているおかずで、ふだん骨があ
 るから面倒くさくておさかなを食べるの
 がきらいなわたるには、お魚の料理の中
 でこれがいちばんおいしく思えるのでし
 た。
 しばらくすると、台所の方で野菜を切
 るトントンという音やおなべのふたのパタ
 パタいう音がきこえはじめました。

外はもう、ぼんやりときいろい光にな
 ってきています。二階の部屋で制服を
 脱いで着替えたにいちやんが、すごい足
 音でおりてきてこたつの所にすわりテレ
 ビのスイッチを入れます。
 「ああ、おなかすいた。」
 といつもの一言をつぶやきます。そし
 て、チラツとハツサクを見て、
 「また夏ミカンかいね、他んもんはない
 ？」
 と台所で忙しそうにしてるおかあさん
 にききました。
 「かんに、おせんべが入ってるよ。」
 と答えるのをきいて、にいちやんは大意
 ぎでかんを持ってきて食べはじめました。
 わたるは、さっきからききたくてうず
 うずしてしまいましたから、
 「ねえ、ねえ、にいちやん……」
 とやつとおちついたたかしに向って話し
 はじめました。
 「ねえ、猫はさ、ライオンと同じ仲間だ
 ねえ、そう言ってたでしょう、まえにさ、
 にくを食べる動物だねえ。」
 たかしは、テレビを見てポリポリとお
 せんべをかじっていましたが、

「それがどうかしたか。」
 とだけ答えてくれました。わたるは、
 「うん、ねこもみかんを食べるもんかい
 ね、うちのねこは食べよるよ。」
 と言ったので、にいちやんは突って相手
 にしてくれませんか。そこでわたるはぶ
 つとふくれてしまいました。ほんとうは
 「猫がしゃべって食べたと言ったんよ、
 して、ぼくが食べさせてやったんよ。」
 と言いたいが、約束は守らなけ
 ればひきようです。そう思ってた
 はぐつとがまんしたのでした。
 「せんべいくらいは食べよう、人間と
 一緒に長いこと暮しておれば……」
 と少ししてたかしはとりなすように言
 いました。そして、その日は、おいしい
 ぼったりを畑から帰って来たおとうさん
 と一緒にたべ、早くおふろに入ってねむ
 ってしまいました。
 ところが、わたるは夜中に恐しい夢を
 見て目が覚めてからみると、ごはんを食
 いつとわたるの顔を見ています。
 うんと昔の白い服をきたおいしやさんの

ような人が、猫と人間を台にしばって何
 かまほうをかけています。そのしばら
 けている男の人は何か悪いことをした人
 のようでした。うにやうにやつと口の
 中で白い服の男の人がいうと、ぱつと人
 間が消えてわたるのうちのねこが目を開
 きました。
 「うわっ」
 といつて、わたるはおかあさんの縫った
 重いわたの入ったふとんをはねのけて目
 がさめてしまったのでした。
 するとまた、わたるのまくらもとに座
 っていた猫は、
 「どうした、恐しい夢でもみよったか？」
 と猫が声でいったのです。でもわた
 るは、もう猫がしゃべつてもおどろいた
 りせず、にきくことができませんでした。
 「ねえ、猫」
 とわたるは少し考えてから、おそるおそ
 る猫にききました。
 「ひるまおまえの言ったことね、あれは
 本当かいね、他の猫達も十年近く人間と
 暮すと本当にしゃべれるもんだろうか？
 と。それは今の夢があんまりはつきり
 していったので、もしかしたらこの猫は昔

人間だったんじゃないだろうかと思つた
 からでした。それをきくと、
 「ふうむ」
 と猫はすわりなおして、片手でひげをこ
 すりしばらくゴロゴロとのどをならして
 ありましたが、やがて、
 「まあ、おれもおまえを信用して信じて
 もらえないような話だがはなしてみよう
 か」
 とつぶやきました。
 「ところで、その夢というのはいつたい
 どんなもんだ？」
 「うん、それがさ、猫と人が台の上にし
 ばられよつた。それから医者のごとあ
 る人が何かむにやむにやといつとつたが
 とわたるが答えると猫はしつぽをぱたん
 ぱたんと動かして、
 「そうね、どうしてじゃらね」
 と驚いたように少し考えこんでしまいま
 した。わたるは、そんな猫がますます
 ただの猫のほすはないと思えてきたので
 「あのな、猫は昔、人間だったとでしょ
 う」

ととききました。すると驚いたことに、
 「そうだよ、随分昔のことだつた
 か忘れたけれど、確かに人間だつた。
 その上、まあ何となくか、王様だつたり
 したんだ。奥におとぎ話じみていて信
 じられんだろうが、しんじやせんよな
 わたるも」
 と答えたのです。
 「ふだんのわたるは信じなかつたかも
 れません。だつた、猫が口をきいてい
 るのです。だつた、上王様であつたな
 猫が昔人間で、その上王様であつたな
 て小さいとき読んでもらったお伽
 話みたりです。猫だつたのです。よ
 てわたるのうち猫だつたのです。よ
 猫はなんでも困つたやうな顔をして、
 ふとんのなかではらばいになつてはじ
 るにはかまわずに身の上ばなしをはじ
 めました。
 「王様というの今は余りないよう
 が、何がえらいんだか知らんも
 んだ。いらい人が、おれも少しは
 んだ。王様だから、おれも少しは
 たちをみたあつた自分だ。りつぱ
 さをよ





「それかな、そのまほう使いがえらいひ
 ねくがな、そのまほう使いがえらいひ
 たが暖かき毛皮か毛布でも出してくれ
 かした暖かき毛皮か毛布でも出してくれ
 と言ったのだ。まほう使いは、
 んたを何かに変えることならやつてもよ
 いと答えた。お望みのままじゃ、
 どもとかけでもお望みのままじゃ、
 うのだった。すぐさま毛皮にしてくれ
 とおうとした。いや、それでは自分
 が死んでしまふなと思いついて、女の子
 を驚かすにすんでいっばあ、女の子
 いけものは何んかと考えたがね。」
 「そこまできくとわたるはなまるほどと
 思いました。」
 「あはあ、わかつた、それでぼくが見た
 ような夢のことになつたんだ。王様は
 猫にしてもらった口を出しました。」
 「そうだよ、それでその女の子のそばに
 いてやるのができたんだ。」
 「その子はとうなつたんかいね。」
 「と大きく、元氣になつてね、とても貧しか

「は王様が森で死んでしまつたといつて悲
 しきよつたが、おれは別に悲しくなん
 分と新しく知ることばかりで棄しかつた
 もんだ。」
 「やつと、長い猫のお話は終りました。
 それに今日は、その女の子にミトンと、
 いっしょにもらつた貧弱なすっぱいみか
 んの味が忘れられずに、わたるにミカン
 を食べさせてもらつたにちがいないとわ
 たるはあとで思つたのでした。
 「それからな、わたるのおかあさんだが
 な、奥にその女の子に似てゐるんだよ。そ
 れでこの家に来たつてわけなんだけど、
 もつともこれは言つてもらつたらこまる
 けどな。」
 「ふうん、どんなところか？」
 「わたるはちよつと心配さうにききまし
 た。」
 「やさしかろう、わたるのおかあさんち
 その女の子も、ほんとうに素直な子だつ
 たよ、およめに行つてもずつとおれをか
 わいがつてくれたよ。」
 「猫はつアールと伸びをしたあとで言った

のでした。それとさ、わたるは、ち
 よつと見恥かしい気もした。が、やさ
 しいおかあさんと、いわれてとてもうれ
 かつたのでした。
 「すつかり夜が遅くなりました。もう、
 恐い夢を見ずにねむれるなと思ひなが
 ら、わたるはもうスヤスヤとねいきを立
 たりました。煙のみかんとおとうさん
 と一緒に、夢なぞみながら、
 「それから、わたるが大きくなるまで、
 猫は二度と口をききませんでし、み
 かんを食べさせようとしても食べたりは
 しませんでした。この日は、いつた、何
 があつたのだらうかと、今でも時々不
 議に思ひ出したりするのでした。」

おしまい



星降る夜に



いったいいつの事だったか。
 その晩、私は確かにしたか、酔って
 た仲間達と南の島の酒をのみ、ゆんた
 海の音を歌ってふっとまっ暗な外をみると
 ぷらりと家の裏へ出る。
 名前などない。
 低い所に月がはりつき、空には一面の
 星。白くミルキイといった感じが納得で
 きる道がある。南十字星の三つまでが水
 平線にかかっているその下に、一人で立
 つていた。
 けだるい、南の夜だ。熱帯夜。
 海の寄せてはかえす波の音。リーフ
 にあたって砕ける波のこえ。いやそうで
 はない。パラパラ、フツフツ……
 な。ほんのきりさめが、屋根にあたるよう
 と向か。あ。そう、でもない。鼻にほぶん
 「熱い」なんだ。うと下をみまゆす。
 延々と白い砂粒たち。かけたサンゴ。
 まるくなった貝がら。じっと目をこらす。
 ちかちかしたガラスの破片。

ん。そうじゃない。
 月は私に何かくれる程近づいてはいない。
 いし、にたにた笑いを浮かべてもいない。
 突然なんだかおかしいな。と気がついた。
 まわりには岩角の雲母のようにキラキラか
 とびちっている。
 さ。これは酔いがまわったかと、それでも
 よくよく目をこらして見れば、砂浜一帯
 がなんとはいけなしにホウツと光っている。
 さゆってはいけなしのだった。何も言わ
 ねたわけはないけれど、そんな気がし
 た。

空から？
 星だった。星降る夜とはよく言ったも
 の。

「おまえたちは星なの」と念のため……
 「そう」とさっき、顔に当たったらしい一
 個が、私のシャツをびつびつと焦がしな
 がら答えた。思わぬ手をだす。完璧なこ
 んぱいという型。
 「だめ」キラキラした声が云う。
 「熱いぞ。今はまだ」
 「この夜のキラキラはみんな そう？」
 「そうだ」

話を交しはじめ、私の出てきた家の中
 からは蛇三線の音が聞える。
 それから星の話。暗い大きな空間の中
 で長い時をすごした星の核。
 宇宙で一ヶ所、ここだけが、青く美し
 い星のサンゴ礁に白くふちどろされた。
 この夜が、落ちてくる星たちの最後の住
 みかなのだと。
 空に目をやる。
 月は妙に神妙な顔で、細いゆれめみた
 いに光っている。南十字星は、ずっと右
 の方へ移動して
 「なんぞ今夜、おまえは外に出た？」
 星の声ではとすると。
 「酔ってたから」答えたら
 「人は一般的に今夜は家の中だ」とキラ
 キラ声が出た。
 浜はもう輝きに満ち、うすいラメのバ
 ールをかぶせたようだ。
 「明日になればわかる」星がぽつと言
 う。「何が？」と私は目をこらしてみる。シ
 ャツにくっついた星型のほじは、一つだ
 けだから冷めるのが、早いらしくて少し
 薄茶色がかかった白の光の粒に変わって。